地域創造コース基礎ゼミ報告

「自然を糧にする営みに学ぶ」

村田周祐*・井端実優**・延東佳音**・宮廻敦樹**・成田真由**・青木蓮音**・
中井美優**・藤原裕希**・徳久唯**・實延美彩**

Studies of Regional Creation Basic Seminar
Learn from Activities that Feed on Nature

SHUSUKE Murata*, MIYU Ibata**, KANON Endo**, ATSUKI Miyazako**,
MAYU Narita**, REON Aoki**, MIYU Nakai**, YUKI Fujiwara**, YUI Tokihisa**,
MISAI Jitsunobu**

キーワード：実学教育，地域連携，農業，林業，漁業
Key Words: Practical Education, Regional Cooperation, Agriculture, Forestry, Fishery

Ⅰ．本稿の意図と内容

本稿の目的は，地域と交錯するなかで創発される「学びの記録」にある。「地域学」の超学際としての側面，つまり座学のための座学でも，実践のための実践でもなく，両者を有機的に結びつけていく実学教育の記録である。具体的には，2019（令和元）年度後期に地域学部地域学科地域創造コース１回生を対象とした「基礎ゼミ（村田）」の記録である。

近年の地域課題は総じて「オバーユーズ」から「アンダーユース」へと移行している。例えば，第一産業をめぐる地域課題は「土地不足（担い手過多）」から「担い手不足（未利用過多）」へと移行し，「耕作放棄農地」「間伐遅れの林地」「放棄漁場」として顕在化している。しかし，こうした現象は統計データとして把握することはできたとしても，その「内実」に触れることは難しい。なぜなら，地域課題の具体的な現れ方は，各々の自然や地域の歴史的文脈に応じて異なるからである。

ところが，現場のリアリティに即した学びを提供することは大変に困難である。例えば農業であれば，生産としての農業を学内圃場で実践として学び，地域課題としての農業を座学で学び，それらを有機的に結び付けることが難しいからである。そこで本授業では，「自然を糧にする営み（農・林・漁業）」の現場に身体を没入し，実践者と協働するなかで地域課題の内実を「知る」から「分かる」へ転換させる実学教育を目指した[注1)]。

本授業は「自然を糧にする」をテーマに，外部講師らが講義内容を独自に展開し，村田は全体のコーディネートに徹した。屋外活動の安全を確保するために，それぞれの活動への参加学生の人数制限を行った。そのため，学生らは全ての活動には参加せず，1人当たり3〜4回程度の参加となった。以下が本授業の概要と講師一覧である。

【林業】
・鳥取県智頭町：赤堀農林代表　赤堀宗範
・鳥取県智頭町：（株）Ｔｒｙ’ｓ代表　橋本登志郎
【華道】
・鳥取県智頭町：（株）皐月屋社員　小谷洋太
【漁業】
・鳥取県青谷町：鳥取県漁協夏泊支所
【農業】
・鳥取県智頭町：森のうまごや代表　岩田和明

以下が，地域との交錯地点に生まれた実学教育の成果である。

*鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース

**鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース・1回生

Ⅱ．学びの記録

1．古さの中の新しさ

井端実優

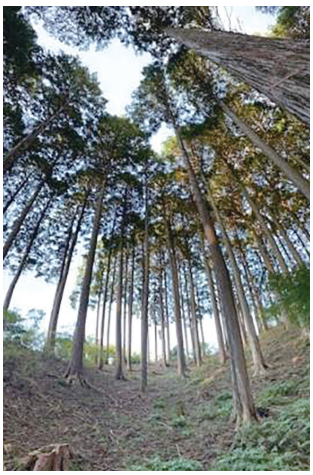
はじめに

日常生活の中で新しいものと聞くと何を思い浮かべて，それに対して何を感じるだろうか。例えば最新機種の iPhone やおいしいタピオカドリンク専門店，AI の知能を持った接客ロボットなど，毎日のように技術が進化し，社会が変化していく中で「新しさ」を感じるのはもう当たり前なのかもしれない。「新しさ」を感じたとき人は，ワクワクしたり，感動したりすると思う。また，人によっては日常のある部分が進化し別のものになるのだから，落ち着かずソワソワしたりするのだろう。その感覚は日本の歴史上誰も体験していない事だからだと思っていた。しかし，基礎ゼミで「林業」と「馬耕」を体験したときに「新しさ」を感じた。これはただ単に，自分が初めて体験したから感じたということではなく，何でも効率の良さを重視し，便利で楽ができるものにスポットが当たる世の中だからこそ感じたものだと思う。また，既にあるものに対して改良を加えてより良いものを人はつくっていくが，その改良を重ねる前の段階にあえて戻る「馬耕」の考え方にまた「新しさ」がある。

1）林業から学ぶ，長きに渡り引き継がれる思い

目先のことだけを考えるのではなく，何百年も先の未来を見据えて活動しており，一本一本の木だけではなく，思いを引き継ぐという意味でも伝統・歴史を感じた。それと同時に，自分の数年先の未来ですらぼやけている自分が小さくみえた。

しかし，一日林業の世界に触れたことで自分の気持ちにも少なからず変化があった。一日の活動の中でまずは原生林散策と焚き火を行った。原生林を見たときは林の表面しか見えていなかったため，「力強くてとても綺麗だな。」と思ったが，一日の活動を終えた自分は「手入れがされていない林の中はどうなっているのだろう」と内部のことを気にかけていた。たった一日で自分の着眼点が変わったのは面白い。焚き火のときもはじめは何も考えず黙々と木を集め，火をおこし，夢中で食べていた。だが，今考えると普段は手が汚れるのが嫌でポテチすら箸で食べるような自分が全く手の汚れを気にせず作業をし，食べ物の汚れも気になる自分が何も気にせず食べていたことには驚いた。自分たちで火をおこし，食べ物を焼き，みんなで一緒に外で食べるという環境が自分の神経質な部分を変えた。これもまた面白い。



百年林　撮影：著者

その後林業体験に移ったが，私は小学生の頃に体験したことがあったため，林に入った時には「新しさ」を感じなかった。木を持ち上げ何十年・何百年の重みを感じ，木にロープを掛け技術がいることを痛感し，木を切って林業に触れた。この一連の流れを通して，林業に関わる人たちはなぜこの仕事を選んだのか疑問に思った。しかし，その後に「百年林」を見て少しだけ理由が分かった気がする。自分たちと生きた時代の違う顔もわからない誰かが，今の時代を見据えて木を植え，大切に育てた木を今自分たちが見て感じている。それが分かった瞬間に自分の視野が一気に広がって，これが林業の魅力だと思った。学歴や個人のスキルによって判断されず，自分のためではなく誰かのために働ける職業に憧れたのと同時に，何百年単位で考えて働く林業に現代社会で生きる自分だからこその「新しさ」を感じた。

2）原点回帰が生み出す「新しさ」

馬耕は効率が決して良いとはいえないし，大量生産できないため販売で稼げる分は限られている。最近では六馬力以上の耕運機も使われるようになり，作業効率が上がっている中でなぜ馬耕にこだわっているのか疑問だった。作業効率のことだけではなく，馬を操る技術も必要になるため，常に気を遣いながら作業をする必要があり忍耐力が必要だなという印象をもった。

いったいどんな人が馬耕をしているのだろうとワクワクしながら現地に向かう途中で，私たちがバッチリ防寒

昼食の様子　撮影：著者

をしているにもかかわらず半ズボンの男の子が歩いてきて衝撃を受けた。雪国で生まれ育った自分でも体がちぢこまってしまいそうな寒さの中歩く男の子の正体は，馬耕を行う岩田さんの子供で，これも育った環境によるものなのかと思うと面白かった。現地に着くと早速馬を連れに向かったが，ゲージも何もないところに馬が二頭いて，草を夢中で食べている姿がなんとも素朴で絵本の中のように思えた。それを見た子供たちの何ら変わらない様子も，私からすると「いや，馬がいるんだよ⁉」とツッコミたくなるような状態で，自分を取り巻く環境や習慣によって人は変わるのだなと改めて感じた。その後馬耕の練習をして，昼食を食べたが，やはり皆で作って外で食べるからなのか，とても美味しくて幸せな気持ちになった。もちろん食材自体がいいものなので美味しいとは思うが，要因は美味しさを共有する誰かがいるということや，みんなで作ったという達成感によるものだと思う。また，極端に言えば「馬耕米」と聞いただけで何だか特別に感じ，味が変わってくる。この日常とは違う何かを体験する際のワクワク感や，今までになかった「新しさ」を感じさせる効果も「馬耕」にはあるのではないかとご飯を食べながら考えていた。

いよいよ午後からは馬耕体験，間の時間に小豆の選別をし，お雑煮を食べた。馬耕の難しいところは馬とのコミュニケーションではないかと思うが，それに加えて有機農業とは決定的に違う何かを見出し，自然農業にこだわる理由を誰かに胸を張って説明することではないかと思っていた。農業のやり方はもちろん人それぞれだが，有機農業の野菜でも美味しくは食べられるわけで，それによって人の身体に悪影響を及ぼすわけではない。根拠はなくとも自然農業のほうが身体にいいことは分かるが，はっきりとした根拠がないと自分的にはしっくりこない。こだわる理由はいったいどこにあるのだろうか。そんな疑問を持ちながら馬耕をしていたが，途中からだんだん馬耕が楽しくなってきて，馬との一体感や，達成感で時間がたつのが早かった。馬耕に対する疑問から楽しさを感じるようになり，自分の気持ちの変化を感じつつ，お雑煮をいただいた。この時にも，少なからず「もやもや」はあったが，答えを突き詰めなくてもいいような感じが何となくしてきたのを覚えている。そんな気持ちであったが，岩田さんに感謝の気持ちを伝える際に自然農業にこだわる理由について聞いてみた。すると「とにかく食材が美味しい。自然農法が身体にいいと信じたい。」という答えが返ってきた。馬耕を体験する前の私なら，なぜ明確な根拠がないのにわざわざ効率が悪いやり方を選ぶのか，ハッキリとした理由を聞きたかったと思うが，この時の私は岩田さんの答えに納得できた。今でこそ様々な農業の仕方があって比較対象があるが，昔はこのやり方だけで，何の農薬も使わずに農業を行っていた。そこには何の疑いもなく，生きるために働く人と働かされる動物がいた。ただこの状況を現代で行っているだけであり，難しいことを考える必要はないのだと思った。害虫や雑草を取り除くために開発された農薬も結局は人の身体によくないというデメリットをもっていて，使用が控えられている。何かを良くしようと思えば犠牲が出て，結局は原点に戻ってくる。その過程を繰り返すなら，いっそ始めから原点のやり方でしてみるのは面白いし，歴史は回りまわって「新しさ」を生むのだと思う。馬耕体験をして時代のサイクルの輪が見えた気がする。

馬耕の様子　撮影：岩田家

3）新しさとは

基礎ゼミを通して，様々な観点からの「新しさ」を見つけた。全ての活動に共通しているのは「自然環境」と常に向き合っていなければならないということであり，人間は気候を操ることも動植物と会話をすることもできないため，その都度対応していかなければならない。しかし，そんな難しい仕事の中に，例えばデスクワークのような仕事には存在しない感動があると思う。全ての活動に対して私が感じたのは，「新しさ」と，もう一つ，言葉は適切ではないかもしれないが「エモさ」である。今の自分の日常では決して味わうことができなかった体験をしたことで，今の気持ちを言葉に表せない…という場面がいくつかあった。それはきっと体験しなければ分からない感情であるため，現代社会の進化の流れに身を任せきって日常を送る私たちだからこそ，一度原点に戻るような体験が意味を持つのかもしれない。古いやり方・考え方も，時代が流れれば一周まわって「新しさ」をもつようになる。また体験をしに行きたい，原点に戻るために。

2. 繋ぐ，紡ぐ

延東佳音

はじめに

私はゼミでの課外活動にワクワクと緊張でいっぱいだった。講師の先生方の役に立てるか，その場に馴染めるかなど自分の立場について心配していたのを覚えている。自分がどこまで基礎ゼミの中で成長できるか期待しながら，以下にある活動と向き合った。

1）自然農法（智頭町）　講師：岩田一家　2019年10月14日（月）

1-1）自然と向き合う

実家に帰る時の景色と変わらない無料のバイパスを走り,バイパスを降りると一気に田舎感が増した。智頭町の山奥くにある目的地をめがけて，鳥取大学から約50分かけて到着した。実家のある西粟倉村とはそれと言って変わらない景色だった。講師の岩田さんに出会い,活動する場所まで案内してもらった。砂利の道をへとへとになりながら歩いた先には，自分たちだけの世界なのではないかというほど360度山で民家も電柱もひとつもなく，携帯の電波も弱々しくなっていた。活動用の長靴に履き替え，活動がスタートした。台風の影響を受けた稲やあずきといった農作物，風で飛ばされたパネルを集める作業をした。台風といった自然災害は第一次産業をしている人にとって，時に膨大な被害を生み出す。天候に左右されるとは生活の一部までも奪われることなのだと感じた。実際に現場に行くことで，自然と向き合ってわかるいい場面だけでなく，実態としての現実を見せてもらえた気がした。

1-2）自然×子育て

作業をしていると，岩田さんの子どもたちは高いところも怖がらずに簡単にあがり，自分たちで考えて活動していた。それを見ていると，不思議と自分にもできる気がしてとりあえずやってみることにした。結果はできないことばかりだったがとても楽しかった。また，私は岩田さんの娘の小学５年生のことを「先輩」と呼びながらいろいろなことを教えてもらっていた。落ちている米粒一つ無駄にせず，子供たちなりに知恵を絞って動いている姿は憧れる部分でもあった。普通では，危ないと止められることも岩田さんはあまり止めなかった。兄妹同士が安全を気にかけて活動しているように見えた。こんなに兄妹の絆が深いのはゲームやスマホでは生まれないものだと感じた。自然×子育ての答えはひとつではないと思うが，私の中での答えは「お互いが思い合って生きるための土台作り」だと考える。

1-3）ご飯のありがたみ

お昼ご飯の時間になり，岩田さんの奥さんが「お昼ご飯の準備をしましょうか」と言ったときに「やった！ご飯だ！」と心の底から喜びを感じたのは，小学生の夏休みの時に母が外で遊んでいる私に呼び掛けてくれた時のあの懐かしい感じに似ていた。下準備の時に野菜に土がついていても気にしない。自分で収穫したトマトをそのまま口に運ぶ。お米が炊けるまで待てないお腹の空きぐわい。豚汁ができるまでのグツグツとなる音。パラパラと雨が降ってきたがそれすらもあまり気にならなかった。成長するにつれてたくさんのことを学んできたが，ちょっとした喜びを感じる余裕をいつの間にか少しずつなくしてここまで来てしまった気がして,今の自分には,ほとんど余裕がない状態なのだと気づかされた。直に太陽を感じながらみんなでご飯を食べることが，楽しくて，おいしくて，大事な失くしものにほんの少しだけ気づけた時間になったことを振り返ってみてとても驚いている。

また，驚いたことがもうひとつあった。それは，差し入れでコンビニのパンが自然農法をしている場に来たときである。私は少しそれを見たときヒヤッとした。交わることのなさそうな二つが同じ場にある時,岩田さんはどのような反応をされるのだろう。気になってみていると岩田さんは感謝の言葉を述べてから,子どもたちにパンを食べさせてあげていた。自分が気にしすぎていたのか，岩田さんの心が広いのか。この行動を見て私は今の時代と切り離して自然農法をするのではなく，時代の変化と寄り添って活動しているように思った。

1-4）手作業で行うことで

脱穀・とうみ・稲刈りは昔にタイムスリップしたのではないかというくらい原始的な方法で行った。自分の体と機械が一体化したように息を合わせて，また無駄がないように丁寧に早く行う。次は，脱穀・とうみを繰り返し行った米を手で触ってしっかりできているか確認しながら作業を行った。太陽が一番高いところを越え，徐々に落ちていく。体内時計の感覚では14時ごろだったように思う。ちょうど昼寝にぴったりな気候，雰囲気で授業なのに眠たい。寝たい，とわがままな自分がでてしまっていた。細かい作業を繰り返し，一粒の米ができるまでの過程をしっかり見届ける。手を動かしながら，機械化が進

む今の時代に手作業でする意味とは何なのか，と考えていた。私はその意味のひとつひとつにコミュニケーションをとる大切さが込められているように感じた。子供たちにやり方を教えてもらったり，たわいもない会話をしたりしながら作業を行う。機械を扱うと完成時間までの時間を気にすることがあるかもしれない。しかし，手作業はコミュニケーションをとることで作業がはかどったり，眠気を吹き飛ばしたりする作用がある気がした。また，自分はこういった中で生まれる緩く，優しいコミュニケーションが好きなのだと思った。

あえて，機械に頼らずに手作業で行う。私たちが体験した一日では到底わからない苦労や困難があるだろうと思う。自然農法の最大の敵は自然と自分の精神力である。岩田さん一家が笑顔で自分たちの生活と向き合えているのは日々自然と真功に向き合い，穏やかに時間の流れとともに自然農法と付き合っているからだと感じた。

2） 自伐林家（智頭町）講師：赤堀さん・篠原さん他　2019 年 11 月 17 日（日）

2-1）植林

鳥取県智頭町の那岐に向かった。3 回目のゼミでもあり，行くまでの道の感じや時間はそれほど感じるものではなかった。鳥取大学からあっという間に着いたという感覚で，外に出ると霧で目の前は真っ白だった。実家に住んでいる時はよく見ていた霧も湖山に住み始めてからは全く見ることがなく，久しぶりに霧のフワフワ感に触れた気がした。10m 先は全く見えないほどの濃い霧だった。その濃い霧がスギやヒノキの木を育てる重要な役割をしていると聞いた時はとても驚いた。

今回の講師である赤堀さんは 100 年以上続く林業一家で赤堀さんは第 15 代目だそう。立派な茅葺き屋根の家で縁側に椅子が置いてあり，家の周りはちょうど紅葉している木々で囲まれており，思わず口から「立派だなあ」と声に出してしまうほどの風景だった。赤堀さんを始めとする講師の中には，大学を卒業されたばかりの可愛いお姉さんや，都会の大企業を辞めて林業関係の仕事をされる綺麗なお姉さんなどなぜここに！？と思わず聞きたくなる方々で，赤堀さんの周りは笑顔に包まれていた。伝統の中に新しい風を吹き込むとはこういった人間関係から生まれるのだろうと先生方の柔らかい雰囲気を見て思った。

植林活動に行く前に薪割りを体験させてもらった。手だけで振り落として割るのではなく，腰を落とすように下までグッと力を入れて割る。割れた時のスッキリ感は他に何で再現ができるのだろう。そう思うほど気持ちいいものだった。

いよいよ植林をする現場へ向かう。赤堀さんが運転するトラックにはヒノキの苗木を 1000 本ほど積んで出発した。森の中をグングンと奥に入っていく。山の麓までは車で入り込んで，次はトラックの荷台に乗り込んで現場へ向かうという。その道は驚くほど長く，怖く，でも楽しいものだった。自然の光を感じながら着いた現場は，ほぼ山の天辺だった。植林をするために削られた山の斜面を見てこれも人間がやったのか，と思うとひとつひとつの場面が繋がるからこそ，私たちがいまここで日常的に見る山々はあるのだと実感した。また，そこにたどり着くまでの一場面を任された自分(たち)にグッと力が入った。

2-2）「作業」の中にある思い

植林活動が初めての人がほとんどだった私たちはまず，赤堀さんから植栽のやり方の説明を受けた。鍬で埋もれているしっかりとした土が見えるまで穴を掘る。何十年，何百年先まで育つかもしれない木を唯一支える根っこをその穴に入れる。有機物を含まないように土を被せて足を使って踏み，根っこと密着させる。うまい棒が割れるくらいの力で苗木を引っ張っても抜けなければ，間引きの時に間違えて切らないようにピンクテープを葉に巻きつける。次の植栽に移るためには 1.8m の間をテープが貼ってある竹でネットからの間隔，上下左右の苗木との間隔を測る。基本的には四角形で苗木を植え，もし無理ならば三角形で考える。この「作業」を 2 人 1 組になって行った。「作業」を行うときは上下でペアの位置が被らないように互い違いで行う。自然と向き合う時は安全第一だからだ。

20 本ほどの苗木を 4 セットすれば終了だと聞き，お昼過ぎくらいまでにはもしかすると終わるのではないかと期待していた。一本また一本と丁寧に「作業」を行った。ペアの子と苗木の位置を測っては，植え，ずれていたら話し合い，また植える。この繰り返しだった。少しずつ慣れてきた頃には友人と「音楽聴きながらやりたいね」や「これは女の人の仕事だったんだって」などと会話が増えてきて，ふと気がつくと自分の体力の消耗に対して苗木が全く減っていないことに気がついた。その瞬間，先の長さを思い知らされた。集中力が切れると疲れが倍増した気がして一度休憩し，「作業」を繰り返した。お昼ご飯食べたり，1 セット終わるごとに休憩をとったり

しながら行った。どんどんと「作業」を進めていくうちに楽しさを見出せる自分がいたり，無で「作業」を行う自分がいたりと言葉で表すとしたら心身一体という単語がピッタリなほど夢中になっていた気がする。

終盤になり，私(たち)はもうヘトヘトで座り込んでしまっていた。すぐに終わると思っていた苗木は山積みになるほど残っていた。途方にくれていた私たちとは違い，講師の方々は自分たちよりも急斜面のところを時には周りにいる仲間たちと楽しそうに話しながら，時には黙々と一人で「作業」されていた。それを見て私は,「作業」をされている時どんなことを考え，思いを馳せながら活動されているのかとても気になった。もしかすると,「作業」と感じてしまっていることが間違っているのではないかとも考えた。しかし，質問してみると，回答は脳内に音楽が流れているやしっかり育つ様子を描いているなどだった。予想していた回答より身近な回答で驚いた。「植林作業」という中にはそれほど重たい思いはないのかもしれない。しかし，日常でする「作業」というものより確実に重いものを感じるのはなぜなのか。きっとそれは無意識のうちに過去-現在-未来が繋がり，繋がる構図が描かれているからだろう。植林とは単なるその場の「作業」ではなく，自分たちも歴史の一場面になる「作業」を生むのだと思った。

2-3）生きるように働く

全ての作業が終わり，最後のお話を聞いていて印象に残った言葉があった。それは,「生きるために働くのではなく，生きるように働く」である。日々生きるのに必死と言えば大げさかもしれないが，大学に入学し半年が経った今，講義，サークル，バイト，人間関係と目まぐるしく時間が過ぎていく中で，私は将来がはっきり描けていないことをとても不安に感じていた。公務員になりたいのか，一般企業に勤めたいのかなど様々な選択肢がある中で自分に合うのは何なのかをずっと模索している。しかし，この言葉を聞いた時，原点を見失っていることに気がついた。自分は生きるために働きたいのか，生きるように働きたいのか。そこの原点が定まることで大きく一歩踏み出せる気がする。植林はただ単に木を植えるのではなく，自分の原点と向き合う機会を与えてくれ，さらに将来への出発点にまで小さな芽を与えてくれたように思う。

2-4）繋ぐ，紡ぐ

基礎ゼミを通して学習が受け身の範囲を超え,「自分を創造する」といった考えに変わった。
今回レポートにあげた2つの活動には共通する部分がある。それは，ほとんど手作業で行うこと，相手のやっていることを否定しないこと，付加価値を大切にしていること，過去-現在-未来が繋がっていることである。まとめとして,「否定しない」「付加価値」に着目しようと思う。

まず,「相手のやっていることに否定しない」とは自分のやっていることに自信を持っているのは相手のやり方を下に見ているからではなく，自分自身と向き合った時に本当にやりたいことをやり，それに没頭できているからこそ自信が生まれるのだと思う。自然農法で食べ物を作っているところにコンビニのパンがあったときも岩田さんは何も言わなかった。赤堀さんは最後の質疑応答の時間に「自分のやり方が全てではない。仲間のいいところ，悪いところももちろん知っているが，それを否定しない。なぜなら，自分の考えを突き通す自信があるから。」とおっしゃっていた。「否定しない」ことは簡単なことではない。自分の進んでいる道が正しいか不安になった時には相手とよく比較してしまう。しかし,「否定しない」ことで，より自分に向き合え自信が持てるようになるのだと気づいた。

次に,「付加価値」である。私は，この大学4年間で「付加価値」について研究したいと思っている。この基礎ゼミの活動の中では，一般的に用いられるプラス α の意味を超える理解には至らなかった。しかし，体験を通して目に見える利益よりも付加価値の方が重視されている現場の存在に気がついた。これら2つは第一産業をされている人から学んだからこそ知れたことだと思う。

いつか現在も過去になる。しかし，過去になるためには未来を生きる人たちのことを考えて行動し，繋いでいかなければならない。そして,「紡ぐ」の意味のようにたくさんの試行錯誤を重ねて，過去から受け継いだ引き出しに未来へ続くまた新しい引き出しを足す。その足し方は“個人”だけの考えでは到底生まれない。“生きる単位”を広げることで多種多様な引き出しが生まれるのかもしれない。それが少しずつ重なり合わせながら，過去-現在-未来の繋がりが繊細かつ太い一本の糸になるように紡いでゆく。自分もその一場面に関われたことをとても嬉しく思う。私もこれからの大学生活，将来を実のあるものするために，日々を繋ぎ，紡いでいきたい。

3. 座って参考書を読むことだけが学びではない～現場に飛び出し，体験する中で得た新たな学び～

藤原裕希

はじめに

10月から11月にかけて私はプログラムに参加し，農業・林業・漁業を体験することができた。この体験に参加する前，私は自然とともに生きるということは無条件に素晴らしいものであると考えていた。そしてそれは，自然と切り離された利便性のみを追求した現代の都市社会にはない，自然とともにある地域の魅力であると考えていた。しかし，いざその魅力の中身について問われた際，うまく言葉に表すことができないでいた。

自然とともにある地域の魅力や特性を活かした地域活性化政策について学びたいと考えていた私は，このプログラムに参加するなかで，自然とともに生きる魅力について深く理解していないことに気づかされた。なぜなら，地域を外から見る視点しか持ち合わせていなかったからである。そもそも地域の魅力とは何なのか，さらにどのような視点で地域を捉えればいいのか。この2つの根本的な問いを自分なりに理解したい。本レポートの目的はここにある。上述した動機から,本プログラムに参加するなかで,実際に現場に出向き，自分で見て聞いて体験したこと，つまり外からではなく内から地域を体感したことについて書き進めていきたい。

1）農山村での農業体験

すべてを手作業で行う真の自然農法

私が最初に参加したプログラムは智頭での自然農法であった。そこで稲・小豆の運搬や外炊飯，脱穀，とうみ，稲刈りといった作業を行った。私は最初，稲刈りは手作業で行い，脱穀やとうみといった作業は機械を用いるのだと思っていた。しかし，そこでは脱穀やとうみを含めたすべての作業を手作業で行っていた。歴史の教科書でしか見たことのない脱穀機やとうみ装置を実際に見て触れることができて驚くと同時に，昔の人たちの苦労を実感することができた。現在，自然に優しい農法といいながらも田植えや稲刈りの際に機械を用いる人は少なくない。しかし，今回お世話になった岩田さんは燃料などを必要とする機械は一切使用しておらず，真の自然農業ともいえるものを体現していた。

岩田さんの自然農法にふれる経験を経て，私には新たな視点が生まれた。地域農業を活性化していくための考え方として農作物の生産量を増やしていくことが挙げられる。この体験をする前の私ならこの考えを当然のように感じていたであろう。しかし，地域には岩田さんのようにすべてを手作業で行う自然農業者もいる。そのような農法で，農作物の生産量を増やしていくのはほぼ不可能である。現場での体験を経た今，私はこの考えが地域の多様な特性に目を向けておらず，現場の状況を全く理解していないものであると感じるようになった。現場に出向き，内から地域を体感することの重要性を改めて理解することができた。

仕事が生活の一部

岩田さんの自然農法を体験して私は仕事と生活が分離することなく，生活の中に仕事があり,「生きるために働く」ではなく「生きるように働く」という生活が営まれている事実を目の当たりにした。実際，私は体験の中で，他者と交流しながら非常に楽しく自分のペースで作業を行っていた。すべての作業を終えた後，疲れはしたものの，それ以上に私の心は充実感で満ちていた。強い圧力に束縛され，仕事と生活が分離した「生きるために働く」ではなく，他者とコミュニケーションを取りつつ，自分のペースに合わせて仕事を行う「生きるように働く」という生活であったから，私はそのように感じたのだと考える。

また，岩田さんは子供たちとともに作業を行う中で，自身の知識や技術を教えていたり，自然に最大限触れさせており,仕事の中で子育ても行っていた。このことから,「生きるように働く」という生活が家族単位で営まれている事実も見て取れた。現在，働き方改革の一環でワークライフバランスの改善が進められているが，私はこの体験から，自然とともに生きることこそワークライフバランスが取れた一種の理想形であると考えるようになった。そして，これこそが自然とともにある地域の魅力のひとつであると言葉にできるようになった。

2）夏泊での定置網漁体験

朝市を行う意義，そして世代間のつながり

夏泊では，定置網漁を体験するだけではなく，朝市の運営にも携わらせていただいた。朝市とは20分という短い時間の中でその日に獲れた魚を，通常の市場価格よりはるかに安い値段で売るというものである。朝市の運営に参加するなかで私は朝市が開かれる意義がよく分からなくなった。市場価格より安価で売るため儲けはほとんど得られないというこ

とに加え，朝市のために作業を一時中断せねばならず，生産効率が低下すると感じたからである。そのような疑問を抱えながら，朝市の現場に立って売り子をサポートする役割を与えられた。朝市が始まると同時に，お客さんや売り子の声が飛び交い，話に聞いていたよりもずっと賑わっていた。

朝市が終わった後，漁師の方になぜ奉仕活動に近い朝市を行うのか尋ねたところ，港を活気づけるために行ったことが始まりだと答えてくださった。たしかに朝市の賑わいはすさまじく，港を活気づけるには十分すぎるほどであった。朝市を始める前は，私たちが体験したような賑わいはなかったのかもしれない。そのような経験があったため，漁師の方は私の質問に上述のように答えてくださったのかもしれない。しかし，その理由だけで漁協側にデメリットしかないようにみえる朝市を，漁師さんの方々が長く続けられるのか納得できなかった。その中で私はある光景を目にした。朝市の現場の中で，漁師の方と地域の方とが非常に楽しそうに語りあっていたのだ。朝市はただ港を活気づけるだけでなく，漁師と地域の人とを密接につなぐものであり，それが朝市を行う意義なのだと考えると，納得がいった。

また，定置網漁を体験する中でも世代間のつながりを感じることができた。現在，漁業ができるのは，先祖の方々が適切な量だけ漁撈することで，海を大切に守り続けてくれていたからである。そして，お世話になった夏泊の漁師の方々も将来世代の人たちが困らないように，過度に乱獲することはしていなかった。農業だけでなく，漁業の世界でもそのつながりを感じ取ることができた。

3）自伐林家での林業体験

10月27日には，伐倒，焚火体験を行い，そこで橋本さんに100年生の森林を見させていただいた。とはいえ，私の生まれた京都府宮津市外垣は山に囲まれており，幼い頃から森林をよく見ていたため特別何かを感じたりすることはなかった。しかし，橋本さんの話を聞く中でその考えは覆された。100年生の森林が今もなお残っているということは4世代前の先祖の人々が植林して，そこから私たちの世代に至るまで大切に育て守られ，託されてきたということにほかならない。つまり，今ある森林の多くは先祖から私たちに対して与えられた世代を超えた贈り物であるのだと理解することができた。同時に先祖の人々のたゆまぬ努力により受け継がれてきた森林を，将来世代にしっかりと継承することが今を生きている私たちの使命なのだと強く思わされた。

11月17日に2回目の林業体験ということで赤堀さんのご指導の下，植林を体験させていただいた。慣れない急斜面に木の苗を植えていく作業は私の想像よりはるかに過酷であった。また，かつて植林は女性が行う仕事であったと聞き，非常に驚いた。私たちが日常的に目にする森林は，車もなかった時代に女性の方々が何日もの間山に籠もり，植林をしてくれた賜物なのだということを知った。1回目の林業体験での学びも相まって，より一層過去から受け継がれてきた森林を未来へ託していかなければならないという強い思いに駆られた。そのような心持ちで，植林を行った。

体験の最後に「今日行った植林をどのような心持ちで行っていたのか」と赤堀さんに質問したところ，「将来世代に夢を託す気持ちでやっていた」と答えてくださった。私たちがその体験の中で植林していたのはヒノキの苗であり，ヒノキを植えるのは初の試みであるとのことだった。それはスギが赤堀さんの所有している山にあまり適していなかったということに加え，赤堀さんが重要建築物の柱として利用される200年生のヒノキを海外から輸入するのではなく，日本で生み出そうという夢を抱いていたからであった。そうはいっても200年生のヒノキを赤堀さんの代だけで成しえることは不可能である。そのため，その夢を将来の世代にしっかりと託して継承させていくことが大切だと赤堀さんは述べておられた。たった1回の植林体験ではあったが，その中で植林の過酷さ，そしてその歴史に加え，現代に生きる人々が将来世代に夢を託すという植林の大切な意義のひとつを理解することができたように感じた。

4）自然とともにある地域の魅力と地域の捉え方
責任ある生き方/無責任な生き方

自然農法，定置網漁，林業を体験した中で私はこれらには共通点があることに気づいた。それは過去から現代，現代から未来といった世代間のつながりが非常に強いという点である。そのつながりは特に林業で強く感じ取ることができた。現在，私たちはそのような世代間のつながりを意識することはほとんどなく，現代という枠組みの中だけで生きている。このプログラムを行う前は，私はそのような生活に何の疑問も抱いていなかったが，実は無責任な生き方を，私たちはしているのではないかと思うようになった。ここでいう無責任な生き方とは，先祖の人たちのたゆまぬ努力や，長きにわたって生み出された知恵・技術が現代社会を支えているにもかかわらず，過去に対して何の思いもめぐらせることなく，

同時に今を生きることばかり重視して，未来の人たちに対して全く考慮しない生き方のことを指す。この体験を通して，私は現代という世界の中だけで生活するという無責任な生き方ではなく，過去・現代・未来を一本の筋として捉えながら生活する，責任ある生き方をしていかなければならないと強く思わされた。

過去・現代・未来が隔たれているのではなく，一本の筋となっているこの世代間の強いつながりを感じられることこそが，現代都市社会には見られない自然とともにある地域だけが持つ魅力であると感じ取ることができた。

4-2）より小さなまとまりで地域を捉える

私が考えていたよりも地域の特性は多様であった。たとえば，岩田さんのように燃料を要する機械や農薬を全く使用しない農家もいれば，機械や農薬を使う農家の方もいる。また，漁業では地域によって漁業の方法が異なり，林業においても橋本さんのやり方と赤堀さんのやり方とで互いに違っていた。
私はこれまで地域のなかにある特性について想像をめぐらせることなく，大きなまとまりとして一括りに地域を捉えていた。上述した地域の特性が多様であるという事実に目を向ける視点を持ち合わせていなかったためである。大きなまとまりとして地域を捉える視点は，その地域の概観を把握するには有効であるが，地域が持つ様々な特性に目を向けるためには，より小さなまとまりで地域を捉える視点が重要である。両方の視点を併せ持つことが地域を捉えていくうえで大切だと考える。そして，そのように考えた際，私には後者の視点に気づくための経験が不足していたのだと本プログラムを通じて感じ取ることができた。

今後,私は地域に赴く機会が増えていくであろう。実際，2 年生になると，私たちは地域調査プロジェクトとして現場に赴き，その地域を調査する機会を得ることになる。その際は，大きなまとまりとしてのみならず，同時により小さなまとまりとして地域を捉え，そこにある多様な特性に出会いながら調査を進めていきたい。

5）現場で見て聞いて，体験する中で得られたもの

本プログラムを経て，本レポートの冒頭に述べた地域の魅力は何なのか，どのような視点で地域を捉えるのか，という 2 つの問いを自分の言葉で言い表すことができた。

まず，自然とともにある地域の魅力は現代都市社会にはみられない責任ある生き方ができることである。そして，地域を捉える視点については地域の概観を把握するための大きなまとまりとして捉える視点，地域が持つ多様な特性に目を向けるための小さなまとまりとして捉える視点，これら両方の視点を併せ持つことが重要であると理解することができた。この体験をする前の私のように，後者の視点を持ち合わせていなければ，地域の魅力は見えてこない。反対に，前者の視点を持ち合わせていない場合も同様であろう。このように私が言葉にできたのも，現場に出向き，自分の目で見て聞いて，体験する中で後者の視点が育ったからだろう。

「目に映るすべてのことはメッセージ」という言葉が示すように，世の中にあるすべてのものは何かしら意味を持っている。その中で私は現場での体験を通して汲み取ることができるメッセージに耳を傾けることが，いまの自分に重要であると本プログラムの中で強く思わされた。私は大学に入ってから，教科書や文献で得た学びに追われる毎日のなかで，外から地域を捉えることに疑問を持てないできた。もちろん，そのような視点からでも行政からのメッセージ，書物からのメッセージなどを汲み取ることができるだろう。しかし，それらのメッセージを汲み取るだけでは，地域の特性を活かした活性化政策を生み出すという私の目標を成しえることはできない。現場での体験を通して，今までうまく言葉に言い表せなかった地域の魅力を見いだせたように，現場のメッセージも汲み取っていくことが，これから地域学を学んでいく私に非常に重要である。

これから生きていく中で，私は多くの世界を目にしていくであろう。その時，外からその世界をただ眺め,そこからのメッセージを汲み取るだけでなく，今回の体験のように現場に出向き，自分の五感を通した体験をして，現場のメッセージもしっかりと汲み取っていきたい。

4. 未知を既知に変えていく

成田真由

1）初めての体験をして

1-1）草刈りと生け花～森を見上げる～

大学内にある古墳の周りをきれいにして生け花をお供えするということで，山歩き専用(？)の靴を履いて，皆で草刈り機やヘルメットなどを持って古墳のある場所まで歩いて行った。草刈り機で草を刈るのが私自身初めてで，自分の身を守るために腰から下にかけてズボンのようなものを巻いて耳あてや顔を覆うものが付いたヘルメットをして最大限の防備

をしていたけれど，草を刈るのがとても怖かった。結構長い間手入れされていなかったのか，草は伸び放題でつるが絡まっていて刈るのが大変だった。それから，その刈った草の周りに植えてある木や木の実，刈った草を使って生け花をした。私の中での生け花は，畳の上に座って買ってきたきれいな花を花瓶に生けるというイメージだったのだが，今回のその場で見つけて取った草や木の枝，木の実を生け花の材料として使うということで生け花へのイメージが全く変わった。その場で花を生ける方が植物そのもののきれいさを間近で感じ，植物本来の使い方はこうだよなと気付かされた瞬間だった。また，雑草としか思っていなかった草も見方を変えればこのように生かすことができるのだということが学べた。そして，今までそのような場所に行ったときは足元が道路のように整ってはいないので注意をして歩くという理由で，下ばかりを見て歩きその見える範囲のものしか見ていなかった。だが，生け花の材料を探している時はそんなことは考えもせずに上を見上げている自分がいた。この時に私は今まで歩くことばかりを考えていたために自分の目下しか見えておらず上にある木の枝や木の生い茂っている部分に目が向けられていなかったということを実感した。

自然の生け花　作…自分

1-2）焚火と伐倒搬出～耳と身体を使う～

智頭の山奥に着いてからすぐ森の中を散歩した。森の中はきちんと道が舗装されていて歩きやすく，どんどん歩き進めていくと下に川が流れているのが見えた。私は森の中に入った時から“音”に耳を傾けていた。ずっとどこかから水の流れる音がしていて気になっていた。普段普通に生活していて音に対してそこまで気を使わないのだが，ましてや水の音なんていつも聞いているはずなのに森の中の音はなぜだか気になってしまっている自分がいて，いつもと違う環境にいるとそんなところも気になってしまうのだと思った。

その後，場所を移動して焚火をしながら昼食を食べた。火を起こす場所を組み立てるところから始め，皆で集めた燃えやすそうな草や細い枝を置き，マッチを点けて火を起こそうとするが，まったく火は広がってくれない。今回の自伐林家の先生であるラフティさんが酸素をブオッと吹き込むと，徐々に火は燃え広がってくれた。いつも電源をつければ誰でも簡単に使えるIHを使っている自分としては，全て1からやらなければならない火おこしはとても大変で，その火を維持するのも慣れていないと到底出来ないことだと身をもって感じた。自分たちで頑張って起こした火を使って調理した食材は格別においしく感じられた。特に自分で作って持って行ったおにぎりを火の中に入れて焼きおにぎりにして食べたのだが，今まで食べたおにぎりの中で一番美味しくて感動した。

それから，木を切るために森に入った。私が今まで行ったことのある森の中の木は，適当な間隔でまばらに生えていて幹もくねくね曲がっていて枝もあちこちに付いているような手入れされていない木であった。しかし，今回の森の木はピシッと一列に並んでいて枝も枝打ちされていて思わず「わあ！」と言ってしまうほど，とてもきれいで迫力があった（図２）。「この森の木は，切って売ろうと思えばそうすることができる木ばかりなのだがそれは絶対にしない，この場所の木は大昔の先祖たちが大切に手入れし育ててきたものであるから」とラフティさんはおっしゃった。だからそれを今の代で終わらせるわけにはいかない，終わらせてはいけないという思い，そしてその木を大切に守っていくとともに，新しい木を植えたりして未来の人達へと受け継いでいこうという強い意志を，その言葉から感じることができた。

1-3）定置網漁～見て，触って，感覚を育てる～

朝の５時半，家を出た時まだ夜なのではないかと錯覚するくらい空は暗く外はとても寒かった。車で移動して漁港に着くともう漁師さんたちが船を出す準備をして待っていてくださった。６時過ぎに出港し船に揺られながら網を引き揚げるポイントまで向かった。私は船酔いする体質なので船が出てからすぐ気持ち悪くなってしまい，船から立ち上がって移動することすら難しかった。だが，漁師さんたちはいつも歩いているように船の上を歩き回り，タバコを吸ったり楽しそうに話されていて，なんでそんなに普通でまったりして居られるのだろうと私は羨ましく思った。しかし，いざそのポイントまで着くやいなや漁師さんたちの顔つきが変わった。ある漁師さん二人は激しく言葉を発していてまるで喧嘩して

いるかのように聞こえた。だがそれは多分，船酔いで何もできず見ていることしかできなかった私なりの推測だが，漁師さんたちなりのコミュニケーションで合図のようなものだったのではないかと体験を終えてから考えた。

港に戻り，採れた魚の仕分けを手伝ったのだが，その仕分けのサイズの見分け方がまた難しかった。特に「中」と「大」がどっちなのか悩んでいると「早く入れな！」と漁師さんに言われてしまった。漁師さんは決断力が早く潔い，いい意味であまり考えない人柄の方が多いのだろうと感じた。それはなぜなのか。漁師さんは刻々と状況が変化し，人間の気持ちや気分ではその状況を変えられない海の上で仕事をしている。だから，悩んだところで自分たちでは変えられないと割り切り，朝一番という限られた時間の中で仕事をする漁師さんにとって悩んでいる時間はもったいない，と思っているのではないかと私は考えた。朝市では，初めて売り子を体験させてもらいお客さんの今にも買いたいという熱いまなざしを目の前で見て，ものを売ることの楽しさと少しだけ人の怖さを学んだ。

整列する木

1-4）地域学研究会～新しい発見～

柴﨑さんの小説の特徴は，小説の中で背景や舞台と言われがちな“場所”を具体的に書くこと。そして，その土地それぞれの人の違いや生活の違いなどを，そこに行ったことの無い人でも分かるように書くということだ。そのお話を聞いて，小説は人物がいてその人の感情がメインに書かれているものだという先入観があった私は，やはり作家さんは凡人とは違う独特な感性をお持ちであると感じた。それとともに，場所や建物を小説に書いて残しておくことは，もしそれがなくなってしまっても物語の中には残り続け，さらに未来に何らかの形として繋がるものとなっていくかもしれないとおっしゃっていた。その話を聞いた時，これまで体験させていただいた林業や漁業などと同じように，小説にもそのようにして過去から未来へと受け継ぐことができる役割があるのだと知った。本を読んでいるときにそのようなことを思いながら読んだことは今まで無く，新しい本の読み方を教わることができたので実践してみたいと思った。

2）未知を既知に変えていく

大学生になるまで家に帰ったらご飯があるのが当たり前，家に家族がいるのが当たり前という生活をしていた自分は，一人暮らしで家族と離れて過ごして初めてそのありがたさを知った。それと同じように，今回のゼミを通して自分がどれだけ楽な生活をして物事に対して受け身だったのかということと，自分の視野の狭さを痛感した。日頃自分が生きるために食べているものやそばにあるものが生産されている現場を実際に見て，今まで私は何も知らずに生活をしていたことを思い知らされた。周りにいる人と同じ情報を得てそれを信じ満足してあたかも知っていた気になっていただけだったのだと自分の知らなさにがっかりした。また，いつもならあまり意識することの無い視野を使った。生け花での草の見え方で，雑草に対する今まで持っていたマイナスの固定観念からの視野の変化があった。これにより，（1）で「本来の～」と記述したが，モノの重要性が変わってくることはあると私は考える。そして，上を見るようになったことと水の音に注目するようになったという，目と耳の身体的な「感覚」の視野の変化もあった。この二つの視野で，自分の知らない新しい世界を見ることが出来たのではないかと感じている。

そして全ての体験に共通しているのは，昔からあるものを時代の変化に合わせながら受け継ぎ，未来の人に残していこうとする先を見据えての努力。そして何かを生産すること(仕事)が生活そのものであるということだった。

私自身に当てはめると，今身の回りで起きていることやこれからの自分のことしか頭になく，ましてや何も分からない未来のこと，人のことまで考えられない。だが，全ての体験には未来を見据えて努力されている人たちがいた。そのようにして仕事をすることがどれだけ大変なことなのか一度体験しただけの自分が知ることは難しかったが，未知を既知に変えていくには何事も自分で体験することが大切だと学ぶことができた。

5. 人と人が創る場

徳久唯

はじめに

私はこの基礎ゼミの授業を通して，林業や漁業，

華道など様々な体験をしてきた。この活動の中で，私の一番印象に残ったのが漁業だった。漁業は他の第一次産業とは全く違うものだった。漁業は農業や林業とは違い，自分で育てたりはせずに，自然の中で育った魚を捕まえてきて販売する。まるで，自分の所有物という実感が薄いのではないかと感じるような漁師さんの振る舞いを多く目にした。例えば，漁師の方はお客さんに対して魚をサービスであげてしまう。もちろん，漁業体験に来た私たちに対してもたくさんの魚をくれた。なんとも気軽に魚を他人にあげてしまうのである。

現在，私は農業に関わっており，お米を栽培している。しかし，夏泊でみたように，気軽にお米を他人に分け与えることは難しい。繰り返しになるが，漁師の方はせっかく苦労をしてとれた魚を本当に気軽に私たちやお客さんにあげてしまうのだ。このような漁師の方と私がしている農業との違いについて考えてみたい。

1）出港

私は11月5日に鳥取県鳥取市青谷の夏泊で定置網の体験をしてきた。定置網漁業とは，季節ごとに回避する魚種の習性を知り，潮の流れを読み適所に網を設置する“待ちの漁”である。定置網漁は“待ちの漁”であるため，漁師さんは，完全に天気や気候，潮の流れなどの自然条件に任せて魚が取れることを願うことしかできない。確かに，潮を読むことで，より魚が多く取れるスポットを予想することは可能である。しかし，それ以上のことはできないため，その日の漁獲量は天に任せているといえる。

漁師さんたちは日が昇りだすと同時に沖へ出港し，定置網へ向かう。午前6時半ごろ私たちが漁港についたころには，漁師さんたちはすでに出港の準備をすませ，私たちの到着を待っていた。私たちは到着と同時にライフジャケットとヘルメットを装着して出港した。港の中ではそこまで気にならなかった波だったが，港を出ると急に荒くなる波とうねりでまともに立つことも難しく，私たちは船の上に座り込んでいた。少し時間がたつと徐々に船の揺れに慣れてきて，ふらつきながらもかろうじて立てるようになった。そんな立ち上がることも難しいくらい揺れる船の中漁師さんたちは談笑したり，タバコを吸っていたりととても慣れた様子で定置網につくまでの短い時間を過ごしていた。漁師さんたちは船になれない大学生である私たちに気を配って下さり，私たちは少しの雑談をしながら，定置網へと向かった。

2）操業

定置網につくとそれまでリラックスしていた漁師さんたちの雰囲気がきりっと変わり，急に緊張感があふれた空気に変化した。操業が始まると漁師さんたちは忙しく動き出し，小舟を出したり網を引っ張ったりと徐々に魚を追い込み始めた。1時間ほど網を引き，魚を追い込む作業を続けると追い込まれた魚が船上から肉眼で確認できるほど水面まで上がってきた。その魚を大きな網と機械を使って船へと引き上げ，船の中にある氷の敷き詰められた水槽に入れていく。大量にとれた魚を氷で〆て漁港へと持ち帰った。私たちが参加した日は大漁であったため漁師さんたちも上機嫌であり，操業の作業が終わると，出港した時のようにリラックスした雰囲気に船上がもどり，漁港へと帰ってきた。

3）選別

漁港につき，船から降りると気温の温かさとすぐになくなった船酔いに驚かされた。寒さと酔いに苦しんでいたそれまでが嘘のように，陸につくとそれらの存在を感じなくなった。漁港では帰ってきた船に積んでいる魚を仕分けするための選別台が用意されており，魚を船から降ろすとすぐに選別が始まった。選別とは魚を種類別や大きさ別に分けていく作業で，私たちもその選別の作業のお手伝いをした。ところが，作業を手伝いはじめた当初は，一目では魚の大きさを見分けることは難しく，何度も漁師の方に間違えて分けた魚を正しいほうに訂正してもらった。

魚は鮮度が重要であるため，少しでも早く選別を済ませる必要がある。大きさを瞬時に判断しながら，たくさんの魚を選別していく。ただ，魚を選別する

には慣れが必要だと思った。また，とれた魚の中には毒を持つ危険な魚もいたりするので，魚についての知識がないとケガをする恐れがあるということもわかった。このように選別の作業だけでも魚の知識や経験からくる慣れが必要になると感じた。その日の朝市用の魚の選別だけが済むと一度選別の作業を中断し，魚を袋や箱に詰めたり，机を用意したりといった朝市の準備が始まった。

4）朝市

夏泊の漁港では毎年4月から11月末までの間の期間のほぼ毎日，朝10時から10時20分までの短い時間で朝市が開催されている。20分という短い時間だが毎回大盛況のようで20分も経たない間に多くの魚が売り切れる。今回私たちが参加した時も多くのお客さんが集まり小さな漁港だが大きな賑わいを見せていた。

私たちも売り子として参加させていただき，手伝いをさせていただいた。朝市が開催する前に船頭さんがお客さんに対して話をする時間があり，お客さんも船頭さんの話を静かに聞いていた。その時間が，私には船頭さんとお客さんの交流の時間に見えた。ぱっと見は，船頭さんが一方的に話しているようだが，よく見るとお客さんも船頭さんの話にしっかり耳を傾け，頷き，魚を見定めながらも，しっかりと船頭さんの話を聞いていることがわかる。船頭の話が終わると，朝市は開催され，私たちは魚を売っていき，お客さんは魚を買って帰った。魚を売っているときにはお客さんは手伝っている私たち大学生にやさしく接してくださった。また，漁師の方もお客さんに対してサービスと言いながらたくさんの鰺をおまけしてあげていた。さらに，漁師の方とお客さんは冗談を言い合うような気さくな関係であり，漁師の方と常連の方はお互いに名前を知っており，まるで友人のような関係に見えた。一般的なスーパーなどに比べて消費者との距離感が近く見えた。魚はすぐに売り切れ，魚を買ったお客さんも朝市が終わる10時20分にはほとんどの人がいなくなっていた。朝市が終わると素早く片づけを始め，片づけが終わるとまた選別の作業が始まった。

5）再び選別

1度目の選別とは違い，今度は朝市ではなく市場に発送するための魚を選別する。私たちも1度目の選別に比べ少し早く選別することができたが，まだまだ漁師の方に比べれば遅く，間違えることもあったが，1回目の時よりも早く終わったように感じた。選別が終わった魚は箱に詰められ発送されるそうだ。ここまでの作業で，この日のすべての作業が終わり，11時過ぎには漁師の方は仕事後のビールを片手に談笑していた。日が昇る前から働き，昼には終わる仕事は私には新鮮に見えた。なぜなら，サラリーマンなどの一般的な仕事がそうであるように，私は仕事とはたいてい朝9時から夜5時まで働くのが普通と考えていたから。私には日の出前から始まり，昼ごろに終わる仕事はとても新鮮に見えた。このような働き方も存在することを知り，自由な働き方は漁師という職業の魅力の一つであると感じた。

6）仕事のやりがい

私が今回の漁業体験において，最も印象に残ったのが朝市だった。朝市には多くの地域の方々や，観光客の方が訪れていた。わざわざ選別の作業を一度中断し，それほど利益が生まれない朝市を開催することが不思議であった。私が漁師の方々からその理由を直接聞くことはできなかったが，朝市を手伝う中で私の中で漁師さんたちは地域の方々と朝市を通して交流しているのではないかと感じた。なぜなら漁師さんたちは魚を売るときにお客さんをしっかり見て，会話をしながら販売していたからだ。私も実際に作ったお米を販売するときに，買ってくれるお客さんの目を見て直接販売することが楽しく，やりがいを感じる瞬間である。それと同じように漁師さんも自分が捕ってきた魚を，小売業者を仲介せずに売ることで消費者と直接対面でき，自分の仕事に対してやりがいを感じられるからこそ，わざわざ手間のかかる朝市を開催しているのではないだろうか。

確かに利益だけを考えると余計な時間がかかり，発送するよりも安い値段で手間を加えながら販売するのは無駄であるともいえる。しかし，漁師の方々は漁がおこなわれる限り毎日朝市を開催している。そこには漁師の方が言っていた，漁港に賑わいを持たせたいという思いに加え，朝市の中で得られる地域の方々との交流を楽しみ，自分の漁師という仕事に対して直接販売をすることでやりがいを感じているのではないか。しかし，やりがいのためだけでは利益を考えると続けていくことは難しい。このように利益だけを考えた販売ではなく，サービス精神を

前面に押し出した朝市を開催している根幹には，初めに言っていたような“捕ってきた魚が自分の持ち物である”という実感が薄いからなのではないだろうか。だからこそ，漁師さんたちは魚から生まれる利益を独り占めすることなく地域の方などの周囲と分け合うのではないだろうか。

7）漁港への愛着

朝市が始まる前の漁師の方のお客さんに話しかけるところや販売の中で実際にお客さんの顔を見て，とってきた魚を売ることで魚を通して地域の方々とのつながりが生まれているように見えた。販売中の会話では何気ない日常的な会話もはさまれており，一般的な小売業に比べてまるで友人のような気さくな関係があった。このような関係は小売業者を通じて販売することでは得られない。なぜなら，漁師の方とお客さんの両方がお互いの顔を知り，直接会話することでお客さんは漁師の方や夏泊の漁港に対して愛着が生まれ，親密な関係が生まれると感じる。そこで生まれた愛着が漁港を盛り上げることにもつながると思う。魚を買うならせっかくだから夏泊の朝市で買おう，夏泊でとれたものを買おうという気持ちにお客さんもなり，その結果漁師さんたちは効率や利益にとらわれずに漁港や地域のために朝市を続けていくことができる。

最後に，ここまで書き進めてきたことを自分のこれからに引きつけたい。漁師さんたちは，今更朝市をやめることはできないといっていた。私も朝市のような生産者と消費者がつながる場を大切にしていきたい。そのためには私は消費者として夏泊の漁港の魚を購入することで応援していきたいと考える。また，夏泊だけでなく，自身の地域に目を向け，地産地消を心がけていきたい。このような場を応援する方法は様々だが，私は自分が作ったお米をお客さんに会い，会話をしながら購入してもらうときが一番自分の活動を応援されていると感じる。そのため，私たち消費者はできる限り現地に足を運び，栽培の場面や収穫の場面，生産者の目で見て，交流し，購入することが一番の応援になるのではないだろうか。それこそが，朝市にある風景だった。朝市を通じて生まれた縁や愛着は，相手の見えないところで行われている流通では生まれない。朝市のような販売を通して生産者と消費者が繋ぐ場を大切に残しこれからも受け継いでいきたい。

6. 自然と共に生きる～新たな自然との向き合いを通して～

青木蓮音

はじめに

私は，様々なことを見て聞いて体験したことで，多くのことを感じ，学ぶことができた。まず，「生け花」「自然農法」「林業」「馬耕」の体験からどのようなことを感じ，学んだのかを述べ，その後にその経験を今後どのように人生の糧としていくかを述べていきたい。

1）自然の華麗さと脆さ

生け花では，まず古墳周辺の草刈りをした。周りの音は聞こえず，作業に没頭することができるが，危険が伴うため常に注意を必要とした。草刈りの後に，その土地に自生している植物を竹筒にさし，お供えした。もう1つの古墳も同様の作業をし，いったん作業を終える。2つ目の古墳は，雑草が生い茂っており，作業の前後で見た目が大きく変わった。作業が終わると疲れもあったが，同時に自然の中に入り，自らの手できれいに整えることに大きな達成感を味わうこととなり，清々しい気持ちになった。

午後からは，大学構内で多種多様な植物を採集した。最初はどの植物を取っていいのかわからず，「本当に学内の植物を取っていいのか」と思い，遠慮していた。採集後，全員でどの植物を生けるか相談し，作品を作り上げていった。生け花には形式張った作法があると思っていたが，実際は自由で，自分の手で採集した植物をアートとして表現するものもあるとわかった。自分で採集したもので表現することは，販売されている植物で表現することとは少し異なる。自然のもので表現すると多くの色がなく，華やかさでは販売されている植物に劣るが，一体感が増し全体で生きていることを感じた。

そして，1週間ほどが経ち回収するときが来た。地域学部棟の裏に戻したのだが，そこに自生している植物の方が生命力・美しさがあり，それを邪魔しているように見えた。生けたときに感じた自然の偉大さや豊かさとは反対に，枯れている植物を見て自然の脆さというものを実感した。

2）自然の恵みと恐ろしさ

智頭町の岩田さんの農場へお邪魔し，森の中の長い坂道を上る。まずは台風の影響で飛ばされた小屋の屋根を回収する作業をした。ここでは，私は生け花のときとは異なり，岩田さんのお話を聞き，台風の生々しい爪痕を見ることで，自然の恐ろしさを知ることとなる。屋根の回収を終えると，小屋にかけてあったイネと小豆を移動し乾かす。その作業がひと段落すると，薪を集めて火をおこし昼食づくりとなった。なかなか火が大きくならず，ただ火をおこすだけでも，雨などに影響されることを実感した。その後，乾燥させたイネの脱穀や山の麓の田んぼの稲刈りを行った。稲刈りや脱穀などの作業を手作業で行ったが，機械ですべて行うほうが絶対に早く作業が終わる。今回は多くの人の手を必要としたが，機械があれば人も 1～2 人で足りる。農薬を使わない分，体に良いものが出来上がるが，そのためには多くの時間と労力を必要とする。これまで「たった 1kg」と考えていたお米に，どれだけの人の想いや苦労が存在しているかということを，お話や体験を通じて実感することができた。人々の想いや苦労など,目に見えない価値があると考えた。

3）自然を利用し，自然に生かされる

木を伐採する前に天然林を見に行った。自然に囲まれることで，それまでに味わったことのないほどの自然の雄大さを感じた。次に,他の場所へ移動し，昼食づくりを行った。前日に雨が降っており，自分の期待通りにはならない自然と共に生きる難しさを感じた。また，明りになるだけではなく，料理をすることのできる火はすごく偉大だと感じた。

その後，木の伐採を見学したが，木の重量が想像よりはるかに重く，自然を相手にする仕事の危険さを感じる体験となった。木が倒れたときの地響きにはただただ驚くことしかできなかった。その後，何代も受け継ぎ，守ってきた「完成形の林」を見に行ったが，それまではあまり感じなかった力強さがあり，歴史的な何かかと思うが雰囲気が大きく異なっていた。そこを後にし，山神様への参拝をするのだが，バイオマス発電の真実を知ることになる。高校生の時までは，バイオマス発電は木を利用するため環境に良いということだけを習ってきた。

当時は「そうなんだ」と思うだけで，深く考えることはなかった。ただ，お参りをした際にふと横を見ると木が全く生えていない場所があった。どうやら，そこはバイオマス発電に利用するため木が乱伐された荒地のようだった。ラフティさんのように想像できないほど多くの年月をかけて守ってきたものを次の世代に残すことを考えている人もいれば，そうではない人もいるとわかった瞬間だった。この体験を通して，自然を利用し生活するだけではなく，私は自然の中で生かされていると感じた。

4）自然と向き合う

馬耕体験をする前に自分たちで馬の代わりに鋤を引いてみた。10 人が引っ張ることでやっと鋤がスムーズに動いた。その作業を馬はいとも簡単にしているように見えた。私はこれまで田んぼでトラクターやコンバインを使い，作業する人たちを見て育ってきた。そのため，私にとって馬耕は初めて経験することであり，とても新鮮であった。昔，全国各地で行われていた馬耕は，時間が経つにつれ人々の頭から消えかけていた。そんな現代において岩田さんは馬耕を自ら行い，我々大学生やそのほかの多くの人に広めておられる。そうすることで，興味を持つ人が少しでもいるのなら，岩田さんがしておられることは，大きな価値があると考える。全く知らない人に知ってもらう，そして，全く知らないことを知っていくことの大切さを学んだ。

岩田さんの子どもたちは「小さな先生」であると感じた。私の方が学校で習う知識は豊富だろうが，生きていくための知識は，小中学生である彼らの方が豊富であると感じた。幼いころから周りに豊かな

自然が広がっており，自然と向き合うなかで自ら学んでいくのかもしれない。私をはじめ多くの人は，幼い頃は少しでも危険があると親に止められていたと思う。ただ岩田さんはできるだけ子どもの好きなようにさせているように感じた。親が自然と向き合う機会を奪わない子育て環境を整えることで，彼らは自然から多くのことを学んでいるのだと思う。

5）この経験を今後どのように人生の糧としていくか

私はこれまで地球規模の環境問題や，自然に関する様々な知識を，学校の授業をはじめとする様々なところで習得してきた。今回，様々なことを見て聞いて体験し，自然を間近に感じるなかで，自分の知識の浅さを実感した。また，これまで生きてきて，雨が降れば雨具を使用すれば良く，雪が降れば自動車を使うことで何不自由なく過ごしてきた。しかし，今回自然のより深いところまで自ら入っていくことで，自然の様々な状況に左右され，思う通りにはいかない難しさや不自由さを感じた。また，自然の美しさや恐ろしさを感じる経験もいくつかあり，それらの経験から自然には計り知れない偉大さがあると思った。そして，今回体験した職業はいずれも生活の中に仕事があり，常に仕事や天気のことを気にかける必要があった。仕事や自然に合わせ生活しておられ，生活と仕事が密着しているように感じた。

私は，普段なら新しい何かをするときは自ら進んですることは少なく，躊躇してしまうことが多かった。今回体験したことはすべて初めて経験することで，初めの方はいつも通り躊躇してしまった。しかし，最後の馬耕では失敗を恐れなくなっていた。というのは，失敗を恐れていては何も進まないことがわかり，とりあえずやってみることで想像よりうまくできることもあるとわかったからだ。

このゼミを通して，私は自然と人間の関係について考えさせられた。一つ目は，自然の雄大さである。自然を俯瞰，あるいは中に入っていくことで場所や生えている植物は違うが，その雄大さは変わらないものがあった。人間の手が少し加わっただけでは壊れることはなく，生き続けている。

二つ目は，自然の恐ろしさである。今年は台風の影響で日程の変更などがあり，自然農法を体験した時はその爪痕が残っていた。また，林業では毎年多くの従事者が犠牲になっている事実を知った。自然災害が起きると被害を防ぎきれないこともあるとわかり，人間の力ではどうしようもない力があると感じた。

三つ目に，人間の恐ろしさである。高校までの授業でバイオマス発電の表の部分しか学んでいない事実を知った。林業の体験をした際に，その裏にある人間の自分勝手な森林伐採を目にした。環境にいいと言いながら，環境を破壊しているとわかった。ただ，人それぞれの考えがあると，将来を見据えているラフティは直接的な批判をすることはなかった。儲けようと思えば簡単に儲けることができるが，将来のことを考える大切さを学んだ。

今回は時間に縛られることなく，気にすることもなかった。また，普段の生活を送る環境とはほとんど真逆の環境であった。そういった環境に身を置くことで，普段当たり前に使っている物のありがたさや，普段の環境の魅力などに気づくことができた。また，前よりも周りの自然を高く広く感じるようになったと思う。このような小さな変化が，様々なことを経験して見られるようになった。

今回経験したことは，座学では学ぶことができないことも多くあり，自らが実際に体験し初めてわかることもあった。体験したいずれの仕事も想像していたより重労働であり，自分のことばかりではなく，将来の世代に何かしらの形や言葉で伝える大変さと必要性を学んだ。この経験を生かし，どのようなことも他人から聞いて学ぶだけではなく，自分で体験し，新たな価値を自分なりに見つけ，新たな知識を自分のものにしていきたい。そのようにして得たものは人生の糧となっていくと考える。

7. 先入観を捨てた先に見えてくるもの

中井美優

はじめに

私には，自分の頭の中で勝手にイメージを持ち，できないと決めつけて挑戦せずに終わらせてしまうことがよくある。ところが，今回の基礎ゼミの活動に参加して，実際に挑戦してみると思っていたよりも簡単だったこと・想像していたこととは異なっていたことが多々あった。以下では，これらのことについて述べていく。

1）森から彩りを

10月6日（日），大学構内でいけばなを行った。「い

けばな」という言葉を聞いて思い浮かぶのは美を追求した堅苦しく，難しいものであった。それゆえ，私には縁のないものだと思っていた。しかし，今回のいけばなは大学内にある植物を用いて，自分の感じるままにお花を生けた。最初に，大学内にある古墳に行った。いけばなを行う前に草刈り機を用いて草を刈った。私は，今から思い返せば，一度も使用したことがないにもかかわらず，草刈り機に恐怖心を抱いていた。さらには，できれば使いたくないと思っていた。しかし，順番が回ってきてやらざる終えない状況になってしまった。ところが，実際にやってみると，危険なものを扱っているという緊張感はあったものの,想像していたほどの恐怖心はなく，案外スムーズに草を刈ることができた。草を刈っているときは無心だった。

草刈りを終えてからは，いけばなに使用したい植物を各自が思い思いに選び，いけばなを行った。古墳を訪れた当初は,「緑ばかりで，こんな場所でいけばなができるのだろうか」と思っていた。しかし，実際に足元や上などあたり全体を見渡して探してみると，さまざまな野花や木の実，いろいろな形をした葉があった。これまでの私は目の前のことしか見ておらず，内部のことまで知ろうとする視点がなかった。自分で勝手に決めつけて終わらせていたのだ。植物探しをしてみて，全体をよく見渡すことで物事を一つのまとまりとして捉えることができ，より多面的に考え，また，より内部のことを知り様々な発見ができるのだと感じた。

この取り組みを通して，先入観を持ち実際に見たり，体験したりしていないにもかかわらず決めつけてしまうことはよくないことだということを学んだ。また，いけばなを体験して，正解を求める必要などないということを学んだ。私は，常に正解を求めてしまっていた。いけばなは自分の感じたことをありのままに表現して良いということが分かった。これからは，正解を求めることをせず自分の感じたままに発言したり，行動することもしていきたい。

2）森を林地に

10 月 27 日（日），智頭町で伐倒搬出と焚火を体験した。まず，天然林を訪れた。そこには，自由気ままに育っている生命力に溢れた木々があり，自然の偉大さを感じた。その後，人工林を訪れた。人工林は木々が規則的にきれいに並んでおり，人が丁寧に育てた苦労が見てとれた。天然林と人工林との違いは実際に見てみないと分からないことだと感じた。今までのわたしは，天然林も人工林も同じような林だと思っていた。しかし，実際に両方の地を訪れると，その違いを感じとることができた。このことから，実際に自分の目で確かめることが大切だと考えた。

11 月 17 日(日)，智頭町で植林を体験した。傾斜の急な山に植林した。油断すると滑り落ちてしまいそうな程危険であった。普段何気なく見ている山々が人々の苦労の末にできたものだということが分かった。また，普段の生活とはかけはなれたものだと思った。スマホが圏外になるような場所で同じ作業を続けていくことが新鮮だった。

これら二つの林業の方法はそれぞれ異なっていた。10 月 27 日の体験でお世話になった橋本さんは地域おこし協力隊として智頭町にやってきて，林業をはじめられた。そして，木をお金と捉えた考え方を持っておられた。11 月 17 日の体験でお世話になった赤堀さんは，先祖代々林業を行っておられて，先祖代々続く木を絶やさないように尽力されていた。

しかし，それぞれのやり方を否定せず，互いを尊重し合っていた。これは植林の体験の時に赤堀さんがおっしゃっていたことからこのように感じた。赤堀さんは,「いろいろなやり方があるのは当たり前なのだ。自分とは違う方法を否定するのではなく互いのやり方を認め尊重することが大切だ。」とおっしゃっていた。このことから，他者のやり方を否定しないことが大切だと感じた。

私は，自分とは異なる意見をなかなか受け入れないことがある。そのため上手くいかないこともあった。この体験を通して，自分の意思をしっかりと持ちながら,他者のやり方を認めていきたいと思った。この二つの体験のどちらも子孫の代まで受け継いでいくことを大切にしているということが分かった。木を大量に伐採すると自分はたくさんの利益を得ることができる。しかし，それでは次の世代まで受け継いでいくことができない。だからこそ子孫の代のことまで考えているのだ。このことに私は衝撃を受けた。それは，私自身，今の生活に必死で自分の利益を最優先し，自分の次の代のことを考えたことがなかったからである。これからは将来のことも考えて暮らしていきたいと思う。

3）先入観を捨てること

これらの取り組みを通して，先入観を捨てて挑戦することが大切であると学んだ。以前の私は，自分の頭の中で勝手にイメージを持ち，できないと決めつけて挑戦せずに終わらせてしまうことがよくあった。草刈り機・チェーンソーを使うことや薪を割る

ことを一度もやったことがないにもかかわらず恐怖心を持ち，やろうとしたことがなかった。基礎ゼミでの活動でこれらの道具を使用することにも抵抗があった。しかし，実際に使ってみると想像していた程の恐怖はなかった。このようなことから，とりあえず挑戦してみるということは大切だと感じた。また，基礎ゼミでの取り組みをする中で，自分は思っていた以上にいろいろなことができるということを知った。私は，怖がりで不器用だから何もできないと決めつけていた。しかし，基礎ゼミでの体験では，自分の想像以上になんでもできた。このことからも先入観を捨てて挑戦することは大切だと学んだ。挑戦することで新たな自分を知ることができるのだ。そして，この基礎ゼミでのプログラムを終えて出身地に対する見方も変化した。基礎ゼミに参加するまでは地元には戻りたくないと考えていた。私の地元・京都府福知山市三岳地区は周りを山々に囲まれた自然豊かな場所である。人は少なく，都会にあるような流行のものはなにもなかった。それが嫌で高校を卒業したら絶対にこの場から出るという気持ちを持っていた。この考え方は都会と比較し，田舎には何もないという先入観をもっていたことで生じていたのだ。今回訪れた場所は自然豊かな場所で，地元と同じような場所であった。このプログラムでの体験を通して，自然とともに生活することの素晴らしさを知ることができた。そして，地元の魅力を感じることもでき，地元に対する考え方も良いものへと変わった。これは，先入観を捨て実際に体験したことで変化できたのだと考える。このことからも，先入観を捨てることは大切だと思った。また，その先に見えてくることがたくさんあるのだと感じた。

これらのことから，先入観を捨てて何事にも挑戦することを意識して今後の人生を過ごしていきたいと考える。先入観を捨てた先には新たな発見がたくさんある。挑戦することで自分自身を高めていくことができるのではないだろうか。そして，人・自然・動物など自分と関わりのあるすべてのものを尊重し否定しないという考え方を持ち続けていきたい。

8. 自分の「意志」で働く

宮廻敦樹

1）新たな学び方

私は基礎ゼミを通して生け花体験や林業体験，馬耕体験，植林体験など，これまでにない経験をさせてもらうことが出来た。その経験は貴重な学びとなった。実際に作業をしたうえで，現場で講師の方のお話を聞くことは，これまでの私の学び方とは異なっていた。これまでは自分の手，足を使い作業しながら色々感じるのではなく，座りながら自分の耳だけを使って学ぶことが多かった。今回の基礎ゼミではチェーンソーや草刈り機を使ったり，馬耕をやってみたり，植林作業をしたりと実際に自分でやってみて体から学ぶことが多かった。体からの学びは，座学では感じることのできない，講師の方々がやっておられる日々の苦労や魅力に近づけた気がした。私はこのレポートで特に印象に残った林業について記述していこうと思う。

2）ラフティさんとの出会い

10月27日，私は智頭町の天然林を見に行った。普段見る森林とはスケールが違い大きく立ちはだかる天然林には圧倒された。次に場所を変え昼食を食べるための火おこしを行った。火がつくまでにはかなり時間がかかりとても苦労した。普段の生活ではボタン一つで簡単に火がつくことがいかに便利なことなのか痛感した。また木々や落ち葉を集める段階から始める火おこしには生活の充実を感じた。ここで言う生活の充実は自然の中にある物から頭を使い時間をかけ火をつけることから得ることができたものであった。昼食を終えて，私たちは山へと入った。山の中で周りを見渡すと木が縦横綺麗に並んでいて驚いた。木々は何十年も前の先祖から植えられたもので現在に至り，さらに今，林業に携わっているラフティさんのような人が未来のために守っていくと考えると，とても感慨深いものがあった。自分一人のことではなく他者とともに生きていくことであると私は感じた。私は「他者」とは，いまここで私の周りに生きている人であると考えていたが，ここで言う他者とは，今を生きる人だけでなく，今ある木を植えてきたご先祖様から，私たちの先を生きていく未来の人のこともさしているのではないかと感じた。

私たちは山の中でラフティさんが倒木する様子を見ることになった。数十メートルもある木をたった一人で倒す姿には圧巻されっぱなしだった。木は勢いよく地面へと倒れかなり大きな音が森中に響いた。ラフティさんは毎年1000人程度が林業で命を落とすと言っていて林業がいかに危険で命懸けの作業であるか学んだ。しかし，倒木をしている時のラフティさんの表情や木がどれくらいの値段がするのか，語っている時の様子などからラフティさんが林業へかなりの愛着を持っていると感じた。ラフティさんは気分が乗らない時は早めに作業を終えて切り上げて帰宅すると言っていたことから林業は自分の好き

なペースで作業できることが伺えた。11 月 17 日の赤堀農林の方々と植林作業をした時もラフティさんはお手伝いに来られ楽しく作業をやりたいということで森本さんと会話しながら盛り上がっていた。ラフティさんは自分のペースで仕事を進めていき，楽しみながら仕事をすることを大切にしているように感じた。

3）赤堀農林の方々との出会い

11 月 17 日，私は再び智頭町へと訪れ，同じく林業を営む赤堀さんのもとで植林体験をさせてもらうことが出来た。植林体験は想像していた以上にきつい作業だった。気を少しでも抜いてしまえば下まで転げ落ちてしまうような斜面の中で作業は行われて，精神的にも，肉体的にもかなりすり減らされた。そんな中，赤堀さんや森本さんが淡々と表情変えずに作業される姿には驚いた。常に危険と隣り合わせの作業だが，気晴らしに周りの山を見た時の景色はとても美しかった。太陽の光を浴びてとても澄んだ空気の中で景色を楽しむのは心が浄化されていくような気持ちになった。こんな環境で働けるというのも林業の魅力であり，働いていてやりがいにもなると思った。私は植林作業をする時に常に赤堀さん達が見える位置での作業だったこともあり，赤堀さんたちが楽しく会話をしながら作業される様子も多々伺え，彼らの仕事中の雰囲気の良さも伝わってきた。さらには，赤堀さん達は作業の進行具合や自分たちの疲労具合に合わせて休憩をしたり，昼食を食べたりしていた。次の作業が自分の意志で決められる自由度が伺えた。

私は最近，ちょっと高級な居酒屋でアルバイトを始めたが勤務時間を自分の意志で決めることは出来ないし，お客さんが多い時間帯で労働負担が大きく休憩したいと思っても自分勝手に休憩することなんて出来ない。その上接客業のため時にはお客様の態度やマナーで困ってしまうこともある。林業は直接お客様に対応することがないため私のような負担がないのである。私のバイト経験から比べると林業の働きやすさを強く感じた。

私たちは植林作業を終えてから赤堀さんの家に戻り赤堀さんのお話を聞いた。そのときに印象に残っている言葉がある。それはお互いを認め合い否定しないことである。林業の中でもみんなが同じやり方ではないため，それぞれのスタイルを認め合わなければやっていけないことを学んだ。これは林業だけに限らず私自身これから生きていく上で重要なことであると感じた。相手の悪い部分から探し始めるのではなくまず，良いところを見つけ認め合っていけるような人になろうと思った

4）「働き方」を考える

私は今回のフィールドワークで林業を「働く」という視点から着目してみた。林業は美しい景観に囲まれながら,時には楽しく会話しながら作業できる。しかし魅力は，それだけでない。ラフティさんや赤堀さんのされている林業は労働時間を好きなように決めている。つまり，彼らの働き方は自分の意志で働く仕事，言い換えると，勤務時間やお客様にコントロールされない働き方だということだ。彼らの林業は，お客様への対応が必要ないからこそ，お客様対応から生じる負担や時間がなくなり，自分の意志で働いていける環境が生み出されているのだと思った。今の日本では，労働時間が決められたり，お客様の対応に振り回されたりするなど，他からのコントロールされることによって苦しみながら働いている人が多い。いわゆるブラック企業に就職するとは，他からのコントロールにより苦悩に満ちた社会人人生を送ることなのかもしれないと考えるようになった。今回の基礎ゼミを通じて自分の意思で働くことができる，林業のような働き方の存在を知ったことが，とても新鮮だった。私は将来，民間企業に就職したいか公務員になりたいか決まってはいないが，今後の人生の選択肢を増やすことができるとても貴重な体験となった。

9. 生きることに手間暇をかける

實延美彩

はじめに

今回の基礎ゼミでは，農業と林業の２つの体験をもとに様々なことを考えることになった。まさか，講師の岩田さん一家と赤堀林業さんの活動に数日間のお邪魔したことが，自分の人生観を変えることになるとは思いもしなかった。ここでは，現場での体験やお二人のお話を自分と重ねるなかで考えた人生や生き様について書き進めていきたい。一般的な「ものさし」で測ったとき，岩田さんや赤堀さんの暮らし方は決して便利で快適な生活とは言えないかもしれない。だが，実際に体験し話を聞くなかで，食べること，働くこと，子どもを育てること，暮らすことなど様々な場面から「生きることをめぐる工夫」がすかし見えてきた。

2）稲刈り・馬耕体験

2-1）自然農法を体験して

2019年10月14日（月）と11月16日（土）に，鳥取県智頭町の岩田さんの農場へ稲刈りと馬耕の体験をしに行った。稲刈りの体験だけではなく，収穫した野菜をその場で調理し食べる活動を行った。岩田さんは馬耕で自然農法を実践している方で，細部まで栽培方法こだわっていた。私自身，高校の時に自然農法を行っていたこともあり，興味深い点がたくさんあった。そのひとつに，草刈り機やコンバインを使わず，昔ながらの農法で作業をしている点であった。その作業の背景に，石油などの化学薬品が畑にばらまかれる恐れがあることを防いでいるという事実を知り，作物への細やかな気配りや，農作への気持ちのかけ方に驚いた。様々な農機具の体験を行ったなかでも，稲穂から米を落とす脱穀作業，米からゴミを選別する唐箕を使った作業は先が見えず，骨が折れた。馬耕で使っている鋤についても日本式と欧米式などの3種類を紹介していただいた。土の調子や人・馬の体力や気持ちの面，馬の性格に合わせ器具を使い分けているさまがうかがえた。

岩田さんは，馬耕で大切なことは「天候」「馬の気持ち」「人の気持ち」とおっしゃっていた。その話を聞いた当初は，体調面は大きな要因かもしれないが，なぜ気持ちが大切なのかわからなかった。だが，実際に馬耕を体験したときに馬と人の呼吸が一つに重ならないとうまく進まず，進めていくにつれ自分の体と馬の体が一体化して一つになるような不思議な感覚に陥った。そして，岩田さんが馬を道具としてではなく，仕事のパートナーとして接している姿も見られ，私の感じた一体感を岩田さんも感じながら馬耕を行っているのではないかと感じた。確かに，石油を使えば楽である。しかし，機械である現代の農機具にはこのような一体感を味わうことはできないのではないかと思った。現代に一般的な生産効率性を重視する農法ではなく，農作業ひとつひとつに気を使うことを大切にする生活をされていること，そして，日常の馬の手入れから田畑の管理，実際に農耕をする際の天候や馬・人の体調，気持ちの管理などに多くの「手間」をかけて農業をしている姿に大きな感銘を受けた。

2-2）子どもを育てる

子育てという面でも学ぶ点が多くあった。岩田さんのお子さんは4人いらっしゃるが，4人全員から生き抜く力を感じた。岩田さんの仕事を手伝っているからか，体つきもたくましく，一番小さな2歳のお子さんは急な坂でも軽々と上り下りし，収穫した野菜をちゃっかりと自分の口に運んでいた。子どもたちの姿を見ていると，ゲームで遊ぶことや人形で遊んでいた私自身の幼少期の遊び方との違いに驚かされた。

加えて驚かされたことは，子どもへの注意喚起のあり方だった。一般的に，子どもが危険な目に合いそうなとき，親はそこに行くことやそのこと自体を止めることが多い。たとえば，水辺に行くと溺れるから危ないので行くのをやめなさいと注意することである。だが，岩田さんはむやみやたらに注意をせず，本当に危ないときにだけ注意していた。私と10歳ごろの元気な男の子のお子さんが稲を干している小屋から飛び降りようとしていた時も，きっと多くのお母さんだったら止めるところを，こっちの草のところだったら大丈夫だと思うよとアドバイスをしていた。岩田さんの子育ての仕方はとにかく「見守る」という姿勢であった。痛いことや危険なことを子供たちに実際に経験させ，体感させることで，やってはいけないことを学ばせる場がここにはあると感じた。この経験を土台にして，子供たちは生きていく中で必要な分別を学びながら自立していくのだろうと感じた。このような環境を子供時代から経験しているということは大きな財産になるのではないだろうか。私自身，母が専業主婦だったこともあり，手をかけて育ててもらった。小さいときに経験した危険な行為は，今となれば経験することのできないものであり，また年齢的にも身体的にも許されるような環境だったからこそできたような経験もある。これをする前から「やめなさい」と言ってしまうのは簡単だが，ぐっと我慢して見守る姿勢に岩田さんの子育てへの信念を感じた。

3）植林体験―先代の息吹

11月17日（日）に，鳥取県智頭町の赤堀林業さんのところで植林体験をした。その日は朝が早かったが，植林場所につくころには陽は高く昇っていた。植林は初めての体験だった。かかわっている人の中には若い女性や男性もいらっしゃり，林業において年齢や性別は関係がないのだと思った。

舗装のされていない細い山道を登っていく途中にみえてきたきちんと整備された山々は，三浦しをんの

小説『神去なあなあ日常』という本を思い出させた。小説の中に，都会から適当な気持ちで林業をやりに来た主人公に対し，上司にあたる人が林業を次のように説明する部分がある。「今この木をすべて切ったらわしらはいい思いをするかもしれんがな，わしらの子供やその子供，その子供は飯を食えんやろう。林業っちゅうのはわしらのご先祖様が大事に育ててきた山を守り抜いて次の世代につないでいく，そういうもんなんじゃ」（三浦，２００９年）と。この言葉を，実際の林業の現場に立ち，赤堀さんのご先祖様のお話や移住してきて林業をしている方々から直接聞くことで，林業における先代の思いや力は絶大であるとことを感じた。林業はほかの第一次産業と違い，まいた種がお金になるまでの経済循環が非常に長い。自分の親，祖父母，曾祖父母だけではなく，家系図からも読み取れないような昔の人の息吹を感じることもできる。きれいに生えそろった大きな木々を見ると，今の世代へと山をつないできた先代の面影を感じた。そして，私たちの行った植林の作業はまさに木々の育つ，その地の山の土と木々が「初めて」出会う大切な瞬間なのだと感じた。また，自分たちのこのたった一日のみの植林体験が，次の世代，また次の世代へと続いていくことに，大きなことを成し遂げているのだという達成感を味わうことができた。

植林体験を終えた後，赤堀さんや従業員の方にお話を聞く場面があった。その中で，従業員の方が林業をしようと思ったきっかけを話してくださった際，「働く場所と生活する場所が違うことに違和感があった。山の中で生活しているのにデスクワークばかりの毎日に違和感を覚えた。今の林業の生活に非常に満足している」とおっしゃった。この語りを，自分なりに解釈してみると，生産の効率化やお金を稼ぐことだけでなく，自分が生きていく生活環境を大切にしたいと聞こえた。また，仕事への取り組み方の姿勢や，自分の仕事・ライフスタイルに誇りを持っている姿に岩田さんと共通している部分を感じた。

４．生きることに手間暇をかける

私は，2 つの体験に共通していることは，「生きることに手間暇をかける」だと考えている。農業にしても林業にしても，生産効率の面を重視して機械化し，作付面積をどんどん広げて大型化していくほうが効率がよいと言われる。だが，岩田さんも赤堀さんもその選択肢を選ばない。そうではなく，農業であれば食べる人，林業であれば木を使う人，今後山を育てていく子孫のことを視野に入れて物事を考えている。しかも，それは自然との関係だけではなく，子育てに関しても同様だ。子供のためと言って，教育専門機関に放り込み任せてしまうのではなく，「自分たちの手」で深い思いをもって子育てをしている姿があった。「専門家」に預けたり，危険な行為を事前にとめたりするれば，親は安心かもしれない。だが，あえて自分の手元で見守る。今の時代は，子供を預け，その料金を稼ぐために自分は働きに出るということが普通の社会になっている。そして，それは国策として推し進められている。そのような時代の流れのなかだからこそ，子育ても働くことにも「手間をかける」生き方に，私は信念や思いを感じた。生きることに手間暇をかけることは，今を真摯に生きているということ，今と向き合っていることなのではないだろうか。そして，それは時間を大切に，命を大切に生きることなのではないだろうか。その象徴的な語りが植林体験を終えた後に，赤堀さんと従業員の方の「働くことと生活することが同じであることの満足感」だったのではないだろうか。

11 月 24 日（日）の地域学研究大会で聞いた柴崎智香さんの作品に，短い間で知らない間に変わっていく街を描いた『その街の今は』という作品がある。自分が知らない間に変わってしまった街と新たに出会い直していく話だ。私は，その主人公の立場に立った時，知らない間に変わる街に関心を示さず通り過ぎていく自分を想像し，素直に悲しいと感じた。自分の住んでいる街であるのに変わりゆくさまがわからない。もしも自分がそのような立場になったらと想像したとき，生きることのむなしさと，生きることの意味を考えてしまった。生きることに手間暇をかけるということは，柴崎さんの小説でいえば町の風景といった，自分にとって身近で些細なことに目や気を配ることからはじまるのではないか。そのように考えると，私は「自然の中で暮らす」ことに憧れているのではなく，生きることに手間暇をかけて生活していくこと，つまりは身近で些細なできごとに激しく関心を示せる生き方に憧れているのかもしれないと考え直すようになった。街の生活でも，季節の空気を感じ，食べるご飯の栄養を考え，地球環境や自然循環を視野に入れながらごみを減らしてみる。こんな身近で些細なことかもしれないけど，

その小さなできことに細やかに目や気を配ることから，生きることに手間暇をかけることがはじまるのではないだろうか。

私はこれほどまでに「生きること」について真剣に向きあうことはなかった。自分の将来を考えるときはあっても，どのくらい効率よく将来有望な人材になれるかといった経済を軸に進路を考え進んできた。今回の出会いは，私に生きるとは何かを真剣に考える機会与えてくれたような気がしている。これからの人生のなかで，私は社会の中で自分の生きていく価値が見いだせないと，つらい思いをするかもしれない。そうであっても，いまの私は様々な生き方を体験したり知ったりすることで,「もうひとつの生きる道」に気づくことが出来ることを知っている。それを私に教えてくれるのは，岩田さんや赤堀さんのような,生きることに手間暇をかける生きる方だ。生きるとは何なのか，人生とは何なのかは人それぞれであり，他人が口出しすることではないのかもしれない。だが，時間を大切に，命を大切に生きるということは，自らの生き方を考えること，手間暇をかけること，自分の仕事や生活に誇りを持つこと，意味を持つことなのではないだろうか。私はこのゼミの２つの経験でその大切さを体験した気がする。これからの私は,自分の生活に誇りをもつためにも，手間暇をかけて生きる暮らしをしたい。

注

１）新妻（2019）は，知ると分かるを次のように分節し理解する。「“知る”というのは，ある情報に接したり,それを客観的に筋道に沿って理解すること。知識。」，対して，「“分かる”というのは，“腑に落ちる”とか“体得する”とか“納得する”というように，その人が持っている感性や思考，体験，などによって形づくられてきた“内なる世界”の中で，自分なりに分かること」という。

文献

三浦しをん(2009)『神去なあなあ日常』，徳間書店
新妻弘明（2019)『科学技術の内と外』，東北大学出版会
柴崎智香(2009)『その街の今は』，新潮社